

指導資料



鹿児島県総合教育センター

国語 第111号

- 小学校・特別支援学校対象 -

平成20年5月発行

PISA型読解力を育成する国語科学習指導の工夫改善

- 「情報の取り出し」, 「解釈」, 「熟考・評価」における発問を通して -

平成19年4月に実施された全国学力・学習状況調査の国語B(主として「活用」に関する問題)は、「平成19年度全国学力・学習状況調査解説資料」(国立教育政策研究所教育課程研究センター)の中で、下記のような内容で構成されていることが示されている。

- ・ 日常生活や社会生活で必要とされる読書・鑑賞・創作などの言語活動の活用に関すること
- ・ 文章を読んで筆者の主張の内容やその表現方法などを評価すること
- ・ 伝えたい内容をまとめて表現すること
- ・ 様々なメディアを活用することによって課題を多角的に探求すること など アンダーラインは筆者

結果は全国、本県ともに平均正答率62%と、

実生活における力(「複数の文章の内容を比較検討しながら読み、観点を整理する力」, 「あるテーマについて、書く事柄を整理しながら自分の考えを書く力」等)をみる問題での課題が浮彫りとなった。このことは、後述するPISA型読解力における課題とも符合する。

したがって、今後、PISA型読解力の育成を国語科における大きな課題としてとらえ、その基本的な考え方を踏まえた具体的な指導法を検討し、構築していかなければならない。

そこで、本稿ではPISA型読解力についての基本的な考え方や、その力を育成するための具体的な実践例、指導のポイントを述べる。

1 PISA型読解力とは

(1) PISA型読解力の定義

PISA型読解力は、次のように定義されている。

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

また、以下の例に示すように問題の観点が三つ設定されている。

ア「情報の取り出し」 2000PISA公開問題例
課題文の一部に「良いスポーツシューズとは、次の四つの基準を満たしていなければなりません」と書いてあります。これらの基準を記してください。

「情報の取り出し」とは、読解のプロセスとして、テキストの中の事実を切り取り言語化したり、図式化したりするものである。上の例では、それぞれの基準を直接引用したり、言い換えたり、または詳細に説明することが求められている。

イ「解釈」 2000PISA公開問題例
落書きを擁護しているソフィアの手紙の内容を読んで、ソフィアが広告を引き合いに出している理由は何かを考えなさい。

「解釈」とは、テキストに書かれた情報を比較・推論して意味を理解するものである。上の例では、落書きと広告を比較している文章の構造をとらえ、広告を

引き合いに出すことが落書きを擁護する手段となっていることを推論する力が問われている。

ウ「熟考・評価」 2000 PISA 公開問題例
物語「贈り物」の最後の文が、このような文で終わるのは適切だと思いますか。最後の文が物語の内容とどのように関連しているかを示して説明してください。

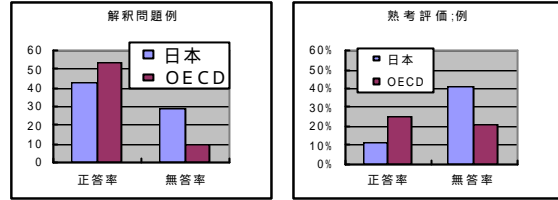
「熟考・評価」とは、書かれた情報を自らの知識や経験に位置付けて理解・評価するものである。例では、物語を正確に理解した上で、その奥に示された意味を解釈し、主題で示された観点から物語の結末を評価する力が問われている。

(2) 現状と課題

例示した「情報の取り出し」問題の正答率は、73.4 (75.9) %，無答率は8.5 (5.1) %と () 内に示したOECD平均とほぼ同程度の結果となっている。一方、

「解釈」や「熟考・評価」問題にはOECD平均との差が顕著に表れている(表1)。

表1「解釈」, 「熟考評価」の正答・無答率



その中でも、無答率がOECD平均より5%以上高かった出題形式は自由記述(論述)に集中していることも判明している。このように、わが国の子どもはテキストの「解釈」, 「熟考・評価」の段階が弱く、とりわけ「自由記述」の問題を苦手としている。PISA型読解力を育成するには、「読む力」だけでなく、「考え」そして「書く力」と連動することに留意し、指導していかななくてはならない。

2 PISA型読解力育成の実践事例(「読むこと」の学習における発問を中心に)

PISA型読解力を育成する具体的な取り組みは、文部科学省が既に示している「読解力に関する指導資料」等が参考となる。ここでは授業を展開していく上で鍵となる発問を切り口として、説明的な文章教材(1, 3, 5年)を取り上げ、「情報の取り出し」, 「解釈」, 「熟考・評価」の各段階における具体的な発問例とそのポイントについて述べていく。

(1) 情報の取り出し

表2 「情報の取り出し」の発問例

教材名	発問例	児童の解答例	学習指導要領との関連
じどう車くらべ (光村1年上)	・ どんなじどう車が出てきますか。どんな順序で書いてありますか。	・ バスやじょうよう車、トラック、クレーン車はじご車	内容の把握・要約(内容の大体、順序)
ありの行列 (光村3年上)	・ 「問い」と「答え」は、どの段落に書いてありますか。	・ 「問い」は形式段落に、「答え」は形式段落	構成・展開の工夫(段落の指摘)
サクラソウとトラマルハナバチ (光村5年上)	・ トラマルハナバチが生きていくために必要なものとは何でしょうか。	・ いろいろな植物とネズミ	内容の把握・要約(文章の内容を的確にとらえること)

「情報の取り出し」における発問は、内容の正確な理解を求めるものであり、教材の叙述を根拠とすることが基本である。説明文では、まず、何が書いてあるかを的確に理解させるために、例に示したように「順序」, 「段落」, 「内容」など各学年の学習指導要領

の指導内容に関わる発問を行うことが大切である。発達段階に応じて、語句から文、意味段落などへとその範囲を広げ、また、考える内容も広がっていくような発問を工夫したい。

(2) 解釈

表3 「解釈」の発問例

教材名	発問例	児童の解答例	学習指導要領との関連
じどう車くらべ (光村1年上)	・ 筆者は、なぜバスやトラックなど、いろいろな乗り物を取り上げたのですか。	・ 車によって、しごととつくりのちがいがはっきり分かるようにするため。	内容の把握・要約(内容の大体を読むこと)
ありの行列 (光村3年上)	・ 筆者は、どうしてウイルソンの二つの実験・観察を事例として取り上げたのでしょうか。	・ 「ありは、においをたどってえさの所へ行ったり、巣に帰ったりするので、ありの行列ができる」というありの行列ができるわけを説明するため。	構成・展開の工夫(中心となる語や文をとらえ、文章を正しく読むこと)
サクラソウとトラマルハナバチ (光村5年上)	・ 筆者は、どうして問いを二つ挙げたのでしょうか。	・ サクラソウとトラマルハナバチの関係が分かりやすいように ・ 要旨をとらえやすいように。	構成・展開の工夫(段落相互の関係、要旨)

「解釈」における発問は、教材文の全体構造を把握した上で行うことが大切である。「なぜ、どうして」などの言葉を用いて教材の内容面や形式面(表現の工夫等)に目を向けさせ、考えさせるところがポイントである。解答例のように、「筆者が取り上げた事例や問いの意味」を叙述を基に考えさせ、筆者の意図等について全体構造を踏まえた推論をさせたい。

(3) 熟考・評価

表4 「熟考・評価」の発問例

教材名	発問例	児童の解答例	学習指導要領との関連
じどう車くらべ (光村1年上)	・ 教材名は、「じどう車くらべ」となっていますが、あなたならほかにどんな題名をつけますか。その理由も書きなさい。	・ じどう車のちがい ・ じどう車のひみつ ・ じどう車のしごととつくり	内容の把握・要約(内容の大体を読むこと)
ありの行列 (光村3年上)	・ あなたは、筆者の説明がよく分かりましたか。理由を挙げて書きなさい。	・ 分かりやすかった。その理由は、問い、観察・実験、答えと分かりやすく説明してあるから。	構成・展開の工夫(筆者の述べ方の工夫)、ものの見方・考え方(自分の考えを明確にしながらか読むこと)
サクラソウとトラマルハナバチ (光村5年上)	・ あなたは、筆者の説明に納得するか、しないかその理由も挙げて述べなさい(50字程度)。	・ 納得できない。トラマルハナバチを先に、サクラソウを後に説明した方が分かりやすいから。	構成・展開の工夫(筆者の述べ方の工夫)、ものの見方・考え方(自分の考えを明確にしながらか読むこと)

「熟考・評価」における発問では、教材の全体構造を踏まえ、1年では「題名について」、3年、5年では「筆者の説明について」、分かるか、納得できるかを問うことで、段階的に筆者の意図や述べ方、考え方について、評価しながら自分の考えを明確にさせることに主眼を置く。その際、書かれていることを根拠とし、立場を明確にして自分の考えを一定の字数で書せるような指導をしたい。PISA型読解力を育成する発問においては、表2～4でも示したとおり学習指導要領との関連を踏まえ、これまで以上に発達段階や実態に応じて発問を精選し、焦点化することが求められる。そのことにより、児童の「読む」、「考える」、「書く」、「話し合う」時間を十分確保し、児童の考えを深めていきたい。

(4) 文学的文章教材における発問例

下に示したのは、「ごんぎつね」(光村4年上)における「情報の取り出し」、「解釈」、「熟考・評価」の発問例である。

- 「情報の取り出し」の発問
- ・ 登場人物を挙げなさい。
 - ・ ごんは、どんなぎつねですか。
- 「解釈」の発問
- ・ ごんは、なぜつぐないをはじめたのですか。
 - ・ 兵十とごんは、分かり合えましたか。
- 「熟考・評価」の発問
- ・ あなたが兵十だったら、ごんをうちましたか。
 - ・ ごんの生き方を、あなたはどのように思いますか。

このような発問の意義は、文学的文章を読んでいく上で大事な要件である「登場人物の行動の理由や人物同士の関わり、作者の意図」などについて、叙述を根拠として、自分の考えを明確にさせ深い読みを促すことにある。

(5) 非連続型テキストへの対応

PISA型読解力の対象となるのは、連続型テキスト(主に文章)と非連続型テキスト(図や表、グラフなど)である。全国学力調査においても、グラフのデータや広告の情報を的確に読み取る問題が出されているが、平均正答率はいずれも60%前半にとどまった。このことから非連続型テキストへの対応も課題であることが明らかとなった。

現行の教科書教材でも、文中に図や写真を載せたものが多いが、PISA型読解力を育成するという視点での取り扱いが明確でない。ここで、「PISA型読解力の育成」を視点とし、非連続型テキストの読み取りにも取り組んだ実践例を紹介する。

(阿久根市立鶴川内小学校 畑添辰也教諭の実践から)

- 教材名 「平和のとりでを築く」(光村6年上)
学習の位置付け(「しらべる・ふかめる」段階)
- ・ 原爆ドームの歴史を読み取る学習
学習の実際
 - ・ 題名に使われている「とりで」と筆者の意図について話し合わせたり、被爆前の写真を掲載することの効果等について考えさせたりした。

この学習による児童の反応は以下のようであった。児童は「被害の大きさを伝えるため」、



「被爆前の写真を使って説明を助ける効果」など、写真の意味や効果を

考えている。さらに、原爆投下前と後の写真とを比較させたり、写真と本文との関係を分析させたりしながら、筆者が写真を載せた意図について問い、自分の考えをもたせることも大事な視点である。教科書教材の中で非連続型テキストとして取り扱う内容を検討し、指導計画に位置付け、意識した指導を展開したい。

有元秀文(国立教育政策研究所)は、PISA型の授業の発問の評価基準(注1)として次の4点を挙げている。

- 問われたことに答えている。
- 本文を正確に理解している。
- 本文を引き写すのではなく、自分の意見が書いてある。
- 自分の主観や体験だけでなく、本文を根拠にしている。

発問の評価基準を教師が明確にもった上で、児童が考え書いたものを適切に評価し、PISA型読解力を培っていきたい。

(注1) 教育科学「国語教育」2007年9月明治図書 P124

(教科教育研修課)